

2025 年 1 月 11 日

第 53 回加藤周一文庫公開講読会 『続羊の歌』を読む

二人の女（2）

日本学術振興会特別研究員

立命館大学授業担当講師

猪原 透

【本章のポイント】

①登場人物

・本章には「パリの女」（『加藤周一世界漫遊記』1964 年に収録）および『運命』（1956 年）と共通する話題もみられる。ただしそれは、その話題が事実であることを保障しない。
・パリで出会った人々や経験の全体を「二人の女」に集約したのかもしれない。また、「二人の女」はそれぞれ加藤と似たところがある。したがって「二人の女」と加藤の対話は、加藤の自己内対話としても読むことができる。

②本章の主題と方法

・主題は、フランスの社会や、（言語・習慣と結びついた）人間関係の持ち方。
・フランスを訪れた日本人の反応／フランス人の日本像を縦糸に、フランス社会の直面する重要な問題への対応を横糸にして、上記の主題を描こうとしている。
・加藤は「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」（1956 年）において、戦後西ヨーロッパの「誰の眼にもはっきりした事実または問題」を 4 つ挙げている¹。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 米ソが圧倒的な存在となり、ヨーロッパの地位が相対的に低下したこと。(2) 植民地の独立と民族主義の高まりに直面したこと。(3) 労働問題が社会の決定的問題として意識されようになったこと。(4) 大量生産と機械化にともなう労働の非人間化、社会生活全体の画一化が生じたこと。 |
|--|

このうち (4) を除く (1) ～ (3) は、本章の基本的なモチーフである。(1) はまた、「戦時下の（フランス人自身による）「抵抗」の評価」という問題に、(3) はまた、社会主義への評価や、ソ連の強制収容所への評価という問題に関連する（カミュ＝サルトル論争）。

③なぜ「二人の女」なのか

・「京都の女」によって日本文化の総合を表現したように、加藤は「二人の女」によってフランス文化を総合的に表現する。それは、「女」とつき合うことで初めて見えてくる、話し方や考え方、人間関係の持ち方、生活のあり方が文化の基礎であるためだろう。

¹ 加藤周一「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」1956 年（『加藤周一著作集 2』平凡社、1979 年）、123 頁。

・「二人の女」という言葉からは、「美竹町の家」の章で、加藤の父が、加藤の祖父の放蕩を非難し、「二人の女を愛するというのは、誰も愛していないということだ。女遊びにすぎない」と述べたことを連想する。本章の内容と一致しているが、意図的なものかは不明。

④本章の構成

・大きく前半と後半に分けられる。前半では、左翼（共産主義者／スターリン主義者）で労働者（学校の教師）の女性との関係が描かれる。後半では、画廊を経営する中産階級の女性との関係が描かれる。一見して対照的に（悪くいえば都合よく）描き分けられている。

・いずれの女性とも加藤は別れることになるが、思想的な対立の結果として描かれているわけではない。それだけにかえて、フランス社会・文化のなかに入り込みきれない壁のようなものを感じさせる描き方になっている。

【第8段落】共産主義者の女性：別れの場面

①私と彼女とのつき合いは、ながくは、つづかなかった。ある日彼女は、静かなところで、たとえば私の部屋で話したいといった。そのとき市中の小さな宿に泊っていた私は、彼女を部屋に案内し、②扉を半開きにしたまま、雨外套を脱ぐのを手伝った。外には霧のような雨が降っていた。安楽椅子にかけて、彼女は部屋を見し、「清潔なのね」と意味もなく呟き、また起ちあがると、半開きの扉をしめて、鍵をおろした。私は黙っていた。③「あなたは医者でしょう」と彼女はいいい、返事を待たずに、身体の具合が悪いから診てくれないか、といった。私は開業しているのではないし、必要な道具も持ちあわせていないから、診るわけにはゆかない、と説明し、しかし話を聞いて相談にはのるつもりだ、とつけ加えた。「道具がなくても、わかると思う」と彼女はいった。たしかに顔色が悪く、疲れてみえた。「いや、わかるかわからないは、まず詳しい話を聞いた上で、こちらが決めることだ、そもそも何処がわるいのか言って下さい」。しかしその話は要領をえなかった。漠然と胃が悪く、腸が悪く、何かの病を想像させるような特定の症状があるわけでもない。私は詳しい話をもとめ、彼女はもどかしそうに「診てくれますか」をくり返した。そして突然、起ちあがると、上衣を脱いで、寝台に横になった。黒い下着の下に骨の細い上半身があり、胸が静かに上下していた。診察をするためには、その上にかがみこまなければならない。「診察」はそれだけで終らぬだろう。せまい部屋のなかで、寝台と私のかけた椅子との間には、三歩ばかりの距離があった。その距離を保つべきか、越えるべきか。私は一瞬間迷った。そして、「いや、診る必要はないと思う」といった。「変な人ね」と彼女は思ったよりおだやかな声でいった、「それでは、どうすればよいか、処置を説明して下さい」。しかし彼女自身にとっても、もはや、そういう話題に意味のあるはずはなかった。雨外套の襟をたてて、霧雨の舗道へ出てゆくとき、なにごともしなかったように、④彼女は、《オ・ルヴォアール》といった。しかし私たちは再び会わぬであろうことははっきりと知っていた。

①「私と彼女とのつき合いは、ながくは、つづかなかった」

・前段落で「私は誰に対しても膝を屈してそのつき合いをもとめることはしない」とあるように、加藤はつき合いをもとめず、女性との関係は破綻する。

・この別れの場面と同じ記述が、「パリの女たち」(1964年)にある。ただしここでは、日本の存在が映画『羅生門』によってのみ知られていたという話から始まり、そのあと「診察」を求められ(本段落と同じ)、そのあと「私は話をスターリンに戻」してピカソの肖像画について議論し、加藤の「ピカソは、だれの肖像を描いても、人物の威厳に興味はないようですね」という言葉に彼女は「冗談じゃない……」と断り、という流れになっている。

⇒ 意見の違いによる決別、というニュアンスが弱まり、「別れ」の意味が変わっている。ただ、(おそらく実際の出来事なのだろうが)展開があまり急で、彼女の人物像が伝わってこない。それだけつき合いが浅かったということかもしれないが。

②「扉を半開きにしたまま」

・「男女のもう少し親密な関係」を期待しているわけではない、というサイン。

・しかし彼女は「半開きの扉をしめて、鍵をおろした」。

③「あなたは医者でしょう」と彼女はいい、返事を待たずに……」

・強引に診察をもとめるが、説明は要領を得ず、本来の意味での「診察」をもとめているわけではないことがわかる。

・加藤は結局「診察」を拒否する(女性に恥をかかせる)が、女性の反応は「思ったよりおだやか」であった。

④「彼女は、《オ・ルヴォアール》といった」

・二度と合わないなら「アデュー」だが、そうではなく、何事もなかったように(また明日会うかのように)「オ・ルヴォアール」と彼女は言った。しかし実際は……ということ。

【第9段落】中産階級の婦人(1)／サン・ドゥニの町との距離

①北米シカゴには、「黒い帯」という街すじがあって、黒人ばかりが住んでいる。パリの北部には、「赤い帯」があって、その住民の多くは共産党に投票する。その「赤い帯」のなかのサン・ドゥニの町を、ある日曜日の朝、私が訪れたのは、②スターリン主義者の婦人ではなく、パリで画廊を経営していたある中産階級の婦人とであった。それは彼女のビュイックで、シャンティーイへ往復する道中であり、往路にサン・ドゥニのロマンの教会をみて、帰路にサンリスを廻り、そのゴティックを見物しようという趣向であった。かねて私は、彼女のビュイックには閉口していた——という大げさになるが、その途方もない大きさを馬鹿馬鹿しいと思っていた。③しかもその頃の米国製の車には羽が生えていた(とびたちかねつ鳥にしあらねば)。④その車でサン・ドゥニの町へ入ってゆくと、壁や舗道には《U. S.

GO HOME》の文字が白墨で書かれていた。「これは共産党員の仕業であると思いますか」と私は彼女の美しく整った横顔をみながら水をむけた。車を停める場所を眼で探しながら、彼女は、意外な返事をした、「描いたのはそうでしょう、感情は共産党員だけのものではないでしょう」。しかし画廊の商売の相手にも、米国人が多いはずではないか。「聞くとところによれば、シャンゼリゼーの一酒家の扉に……」と私はいった。その話を私はどこかで読んだばかりであった。彼女は先廻りをして笑いだした。「……誌して曰く、《U. S. DONT GO HOME》でしょう——たしかにそういう面もある。ただ金で買えないものもあるということね」。車を降りるときに、私は、教会の傍の舗道で、立ち話をしたり、日向を愉しんでいた労働者たちの視線が一斉に私たちの方に注がれるのを、感じた。どんなやつが途方もなく大きな車のなかから出て来るのか。それが米国人の観光客ではなく、フランス人の女と人相のよくない東洋人で、その関係たるや一目瞭然ということからは甚だ遠い……⑤彼女は平然として、教会を見ていた。労働者たちは、彼らには興味のないものを見ていた彼女を見ていて、私はその労働者たちを見ていた。彼らと私の間には、遠い距離があった。その距離は、私に、昔埼玉県の村の畦道で、見えかくれしながらついて来た村の子供たちを思い出させた。子供の私は、そのとき、彼らと私との間に越え難い距離を感じていた。私はそのときから変らなかったのであろうか。私はどこでもいつでも第三者であり、傍観者であるのだろうか。⑥

①「北米シカゴには、「黒い帯」という街すじがあって……」

・「黒い帯」(Black Belt) は貧しい黒人 (アフリカ系アメリカ人) の多く住む地区を指す。シカゴにはアメリカ南部に通じる鉄道駅の周辺に、南部から移動してきた黒人が多く住み、「黒い帯」が形成された。

・赤い帯 (ceinture rouge) は、パリ郊外のフランス共産党の力が大きい地区を指す。「赤い郊外」(Banlieues rouges) と同。パリ北部のサン・ドゥニ (St. Denis) はその典型で、戦後の市長はほとんど共産党。移民や貧困層が多く住むという点では黒い帯と同じ。

②「スターリン主義者の婦人とではなく、パリで画廊を経営していた……」

・赤い帯のサン・ドゥニに、(スターリン主義者ではなく) 典型的な中産階級である婦人と訪れることの意外性を強調している。この段落で書かれるような出来事は、おそらく実際にあったのだろうが、「パリで画廊を経営していた」など細部の描写が事実であるかは疑わしく、本章前半で描かれた「スターリン主義者の婦人」との対比を意図した脚色ではないか。

・婦人の運転するビュイックはアメリカの自動車メーカーGMが生産する大型高級車であり、婦人の豊かさと、「U. S. Go Home」と書くサン・ドゥニ市民やスターリン主義者の女とは対照的な考えの持ち主であることを示唆している。なお、車だけでなく、後述するように婦人の部屋も大きすぎて、加藤は落ち着くことができない。対してスターリン主義者の女は小柄で、彼女と別れるのも「小さな宿」である。

③「しかもその頃の米国製の車には羽が生えていた(とびたちかねつ鳥にしあらねば)」

・「とびたちかねつ鳥にしあらねば」は、「貧窮問答歌」の反歌(長歌のあとに添える短歌)
「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」を踏まえた冗談。

④「その車でサン・ドゥニの町へ入ってゆくと、壁や舗道には《U. S. GO HOME》……」

・戦後は米ソが圧倒的な存在となり、ヨーロッパの地位は相対的に低下する。それへの(様々な)反応を通してフランス社会のあり様を描くのが、本章の大きなモチーフ。

・本章の前半では左翼の人々の口を通してフランス社会の「反米」が描かれた。後半のこの段落では、それだけではない側面(米仏の経済的な結びつき)が描かれる。

・《U. S. GO HOME》と《U. S. DONT GO HOME》のくだりは、小説『運命』(1956年)にもみられる。主人公のひとり(画家)が、つき合っている女性(夫を亡くしトゥールーズの美術館につとめているという設定)から聞いたことになっている。ここでは、《U. S. GO HOME》と書くのは一般に在仏米軍の撤退を求める共産党員の仕業と考えられていること、大部分のフランス人は自ら書かないが、みずから消して歩く労もとらない(＝一定の共感をもっている)ことが注記されている²。

⇒ フランス社会の反米的感情と米国人観光客に依存する現実、それを諧謔するバーの店主の機智。そしてそれらを客観的に観察する婦人の姿を描いている。それが「意外」であるのは、万事を共産主義者の悪事に還元する(中産階級にありがちな)偏見から、婦人が自由であるため。

⑤「彼女は平然として、教会を見ていた。労働者たちは……」

・婦人は教会を、労働者は婦人を、加藤は労働者を見ており、どの視線も一方通行であることが描かれている。直前まで労働者たちは「私たち」を見ていたはずだが、加藤とサン・ドゥニの労働者との距離(＝加藤がよそ者であること)を示すために、労働者は加藤を見ていない(＝婦人だけを見ている)ことにされている。

・「土の香り」(『羊の歌』)には、父の田舎を訪れた加藤が、自身がよそ者であることを自覚する場面で、以下のように書かれている。「私と田舎との関係が、一方では村の子供たちから見られる関係、他方では宴会の男女を見る関係からはじまった、というのは、注意しておく必要があるかもしれない。相手に見られながら相手を見るという相互的な関係は、はじめからなかった」

・相互的な関係が成り立たないということは、加藤はサン・ドゥニの労働者、ひいてはフランス社会に対して「高みの見物」をしているということ。ここでは「第三者であり、傍観者」という言葉が使われている。ローマの裏街では子供たちが「彼らの街を見物している私を見物していた」(第6段落)が、ここでは加藤が「見物」する側になっている。

² 加藤周一『運命』(講談社、1957年)、101頁。

⑥書籍化の際に削除された部分

教会を見物したあとで、私がサン・ドゥニで珈琲を一杯飲んでゆくことを提案したときに、彼女は反対しなかった。私はその町と人々に好奇心をもちはじめていた。日曜日の労働者の町はくつろいでいて、舗道でも、珈琲店のなかでも、男たちが立ち話をしたり、「パチンコ」様の機械で暇をつぶしたり、ぶどう酒をのみながら新聞を読んだりしていた。私はその新聞のほとんどすべてが《^{ユマニテ}Humanité》であることに気がつき、突然共産党がフランスにおいて第一党であるという事実を想出した。戦前の日本では、共産党は非合法政党であり、警察が絶えず共産党員を追いまわしていた。戦後の日本では、共産党は合法化されたが、「赤旗」は、おそらく日本中のどこでも、町中が日曜日にくつろいで読むような新聞ではなかった。私とサン・ドゥニの町との溝は深かった。

⇒ ここでは「私とサン・ドゥニの町との溝」について語られている。だが、内容はむしろ「戦後の日本」と「サン・ドゥニの町」の溝に関するものであるし、ここを削除した方が「高みの見物」に関する話題として筋が通ると判断したのだろう。

【第 10 段落】中産階級の婦人（2）／婦人から受ける印象

①しかしパリの彼女の周辺と私との間の溝も浅くはなかった。礼儀正しく、傲慢で、豊富な話題をもち、冷く、浅薄な男女と、数時間も一しょにいと、私は退屈し、時間を浪費している私自身に対して苛立ってきた。そういう男女のなかに混った彼女自身も、私には興味がなかった。いわば魚の水を得たように、そこで彼女は生々として、よく喋り、よく笑っていた。話相手の話を半ば聞きながら、次の相手を物色し、誰にも愛想がよく、誰のいうことにも上の空であつたにちがいない。「ああ、疲れた、これも商売上必要なのでしょう……」——冗談ではない、商売上の必要なら、何もこっちまで巻きぞえにすることはあるまい、と私は思った。②しかしひとりになると、彼女は、ほとんど別人のように、静かで、敏感で、思いやりがあった。若くして結婚し、夫と別れていたが、別れた夫を思い出すことはほとんどないといっていた。私は彼女と二人だけでいて退屈したことは一度もない。③しかしなぜ彼女が私と会うのかという理由は、はっきりしなかったし、そのことが、常に私の気持ちを不安定にしていた。④パッシーの彼女の家には、パウル・クレーの見事な蒐集があった。そもそもある人を通じて、その蒐集を見に行つたことから、私は彼女と識るようになったのである。しかしその後度々訪れたその家で、私がほんとうに落ちつくことはできなかった。その部屋は大きすぎたし、部屋のなかには、私と関係のない生活を記念する品物が多すぎた。

①「しかしパリの彼女の周辺と私との間の溝も浅くはなかった」

・雑誌連載時に第 9 段落の末尾にあつた「私とサン・ドゥニの町との溝は深かった」を受けた表現。第 9 段落では加藤と婦人の親密な関係が描かれたが、ここでは溝が描かれる。

・フランスの社交界に対する加藤の冷ややかな見方については、「日本からみたフランスとフランスからみた日本」（1952 年）にも書かれている。

・戦後の日本では、フランス文学は社交界の文学であり、日本でも社交界が生まれるのが望ましいという見方があったという。しかし加藤は「社交界そのものは言語道断にばかげた、鼻もちのならぬ代物で、日本に生まれるのがのぞましいどころのさわぎではあるまいと思っていた」という（同上）。

・新しい時代に適応して米国人も相手に画廊を経営する婦人が、同時に社交界という古い文化的伝統のなかで巧みに泳いでいる。ここでは中産階級の婦人を通して、新旧の文化のはざまにあるフランスの現実を描いている、と読むことができるだろう。

②「しかしひとりになると、彼女は、ほとんど別人のように、静かで、敏感で……」

・社交の場での婦人は、よく笑い、誰に対しても愛想はよいが、誰に対しても上の空であった。しかしひとりになる（加藤と二人きりになる）と、上記とは真逆の性格になる。社交界の場では加藤は退屈するが、婦人と二人きりのときは退屈しない。

・ここでもスターリン主義者の女と対照的な人物として描かれている。スターリン主義者の女は、物事をはっきり言わない日本人には厳しく感じさせる話し方をし、結婚しているが夫の存在を感じさせない。中産階級の婦人は、愛想よく、夫と別れているが「私と関係のない生活」（＝夫と過ごした時間）を感じさせる。二人の女はフランスの言語や文化のそれぞれ別の側面を表している。

③「しかしなぜ彼女が私と会うのかという理由は、はっきりしなかったし、そのことが……」

・加藤は婦人とのあいだに越えがたい距離を感じている（＝相互的な関係が成り立たない）。また、次の段落で書かれているように、婦人は「日本人だから」という理由で加藤と会っているのではないかと疑っている。

④パッシーの彼女の家には、パウル・クレーの見事な蒐集があった

・パッシーはパリ 16 区の高級住宅地。先述した『運命』（1956 年）の女性もパッシーに住んでいる設定。また、「パリの女たち」（1964 年）には、「ある年ある婦人を、私は彼女の آپルトマンにたずねることが多かった。その古い آپルトマンには、たくさんの古い家具があり、皮の表装の本がたくさんあり、窓からはモンマルトルの丘とサクレ・クールの大圓蓋が見えた。私はそこで、彼女ばかりでなく、何人かの人たちに出会うことがあった。また彼女だけに会うこともあった」とある。ただしここでは画廊の経営者としては描かれていない。

・パウル・クレー（1879—1940）はスイスで活躍した画家。第 13 段落で再び言及されるが、クレーの作風（「機智と諧謔、微妙な線の動きと甘美な色調の変化、またその画面の触感」）を婦人と重ね合わせているのだろう。

・ここでクレーが選ばれているのは、加藤が好んだ画家ということもあるだろうが、社会主義リアリズム（＝スターリン主義者の女が推奨する芸術）との対照も意図されているのではないか。

【第 11 段落】中産階級の婦人（3）／人種的偏見／婦人の現代フランス観

①「日本人だからではないの、あなたと話しているといつまでも倦きないから」と彼女は言った。「あなたはパリの犯罪の大部分が、アルジェリア人の仕業だというつもりではないでしょうね」と私はいった。「でも統計によれば……」「いや、あなた方はわれわれとちがわないのだ」と私はつづけた、②「在日朝鮮人の犯罪について統計をつくった日本人と。彼らが罪を犯すから、そういう統計があるのではなく、そういう統計をつくるから、彼らが罪を犯すのだ」「手きびしいのね、今日は」と彼女はおだやかにいい、「手きびしいのは、私ではなくて状況である」と私は答えた。③彼女にとって、インドシナの「汚い戦争」は、本国の腐敗を助長する以外に、何の意味もないものであったが、「マンデス・フランスは嫌い」であった。「ジェラルール・フィリップほどの素晴らしい役者が、共産主義者であるのは意外」で、しかし「抵抗」のなかで共産主義者の果たした役割をみとめないのではなかった。④「もっとも《抵抗》がほんとうにはじまったのは、ノルマンディー上陸以後だということを忘れない方がいいと思う」と彼女はいつていた、「それまではドイツ人に感心していた人たちも多いのだから。《抵抗》だといって、田舎の家に入り、貯えを持ち去った人たちが、みんな英雄でもなかったでしょう……」。⑤そういうときの彼女には、超然とした一種の客観主義があったように思う。けだしある種の客観主義は、特権階級だけが時として支払うことのできるぜい沢であるのかもしれない。

①「日本人だからではないの、あなたと話しているといつまでも倦きないから」と……」

・第 7 段落でも日本人の加藤に向けられた人種的偏見が描かれたが、そこでは「自分だからあなたとつき合っている、他の女はそうはゆかぬだろう」という類の偏見であった。この段落では逆に、「日本人だからつき合っている」(＝日本人への好奇心／加藤個人への無関心)という類の偏見が描かれている。

・第 10 段落で「しかしなぜ彼女が私と会うのかという理由は、はっきりしなかった」とあるが、婦人は加藤が「日本人だから」会っているのではないかと疑っている。婦人は「日本人だからではないの」と偏見を否定するが、加藤はそれを信じない。「〇〇人なら××であろう」という偏見を婦人が持っており、現に、「パリの犯罪の大部分が、アルジェリア人の仕業だという」偏見も信じているのではないかと追及する。

②「在日朝鮮人の犯罪について統計をつくった日本人と。彼らが罪を犯すから……」

・在日朝鮮人やアルジェリア人が犯罪をおかすという偏見があるから統計が作られ、統計が作られることで一層偏見は強められ(＝個人の違いは無視され、「在日朝鮮人は・アルジェリア人は潜在的な犯罪者だ」とみなされる)、それが実際に彼らを犯罪においやる。

・植民地支配によって生じた問題という点では、在日朝鮮人とアルジェリア人は同じ。このとき加藤は、「事の本質」を説いたスターリン主義者の女性と似た役回りとなっている。

③「彼女にとって、インドシナの「汚い戦争」は、本国の腐敗を助長する以外に……」

・第1段落にも書かれている、スターリン主義者の女を含む「左翼」の人々が高く評価するもの——インドシナ戦争とマンデス・フランス、ジェラルール・フィリップ、抵抗——の価値に婦人は留保をつける。だが、婦人は積極的にそれと対決するわけではない。

・「汚い戦争 la sale guerre」と呼ばれたインドシナ戦争は、ヨーロッパのアジアに対する支配力の低下を象徴しているが、婦人はそれに無関心である。だが、インドシナからの撤退を主張するマンデス・フランスのことは「嫌い」とあるという。

・戦後のヨーロッパで労働問題はいよいよ決定的問題として意識されるようになり、共産主義のもつ意味を大きくなったが、婦人はジェラルール・フィリップが共産主義者であることは「意外」だと言うだけで、価値判断を示さない。

・戦時下の共産主義者による「抵抗」は、反共政策への「抵抗」の起源として重要な意味をもつ。しかしその価値にも婦人は留保をつける（ただし積極的に批判するわけではない）。
⇒ 婦人は同時代の新しい動きに対して懐疑的であり、何事にも断定的で旗幟すこぶる鮮明であったスターリン主義者の女（第4段落）とは対照的である。

④「もっとも《抵抗》がほんとうにはじまったのは、……」

・「一九四六年」の章では、加藤が戦時下のフランスでファシズムに「抵抗」した文学者たちに注目し、「日本の後れ」を感じたことが描かれている。それとともに、自身がフランスを実際に見ておらず、事態を単純化していたことにも触れられている。その後、フランスで「抵抗」を相対化する議論に接したこと、「フランスの所謂「抵抗」の文学が戦後に忽ちその活力を失ったこと」³に強い印象を受けたとみられる。

⑤「そういうときの彼女には、超然とした一種の客観主義があったように思う……」

・戦時下の「抵抗」に対する見方は懐疑的なものであり、現に反共政策への「抵抗」に邁進する左翼の人々からは出てこないものである。「事の本質」に対して「その場の状況」による留保をつける、という点では第4段落の加藤と同じ。しかし、そうした客観的な見方が可能であるのは、彼女が特権階級に属し、「手きびしい」状況と向き合わずに済んでいる（＝何らかの立場を選ばずに済んでいる）からだという。

・「超然とした一種の客観主義」は特権階級の「ぜい沢」とあるという。何らかの立場を選ばないことで公平・客観的な見通しが得られるという点では、「高みの見物」と重なる。

⇒ 婦人を通して、「たとえば私はフランスの社会をみて、そのなかでゴタゴタ議論しているフランス人の大部分よりもゴタゴタ議論されている事柄の決着を早く正確にみとおせるように思う」という加藤自身のことが語られているのではないか？⁴

³ 加藤周一前掲「ヨーロッパ思想・新しい現実との対決」121頁。

⁴ 加藤周一「高みの見物について」1954年（『日本の内と外』文藝春秋1969年）145頁。

【第12段落】中産階級の女（4）／別れの場面

①その日、シャンティーイの色づいた森は、午後の陽ざしのなかで金色に輝いていた。私たちは森のなかを歩き、私は彼女の眼のなかに、高い秋の空が映り、白い雲がしずかに動くのを見た。②そのとき私は恍惚として万事を忘れていた。ただひとつの考え、それが決してながくはつづかぬだろうという考えそのものだけを除いて。——事実それはながくつづかなかったばかりでなく、彼女は決して同じ事を二度くり返そうとしなかった。③パッシーの彼女の部屋で過ごした夜とその晩のカルヴァドスの味は、シャンティーイの森と共に、ながい間私のなかに昨日のここのように生きていたが、そういう事は二度とおこらなかった。好奇心の満足がそういう態度をとらせていたのか。道楽が他に多すぎたのか。それともつき合いを長く保つためにみずから課した一種の節度でもあったのか。私の疑いは決してはれなかった。疑うことに疲れたときにだけ、私は万事を好都合に解釈した。④彼女はシャンティーイの後で、こういつていた、「医者の仕事は羨しい、生きてゆくことにとにかく目的があるでしょうから」……

①「その日、シャンティーイの色づいた森は、午後の陽ざしのなかで金色に輝いていた……」

・「日曜日の朝」にサン・ドゥニを訪れ、「午後の陽ざし」を浴びてシャンティーイの森を歩いている。スターリン主義者の女との別れは、霧のような雨の降る夜のことであったが、それとの対照が意識されているのだろう。

・午後の陽ざしは「金色」に輝き、婦人の眼のなかに「白い雲」が静かに動くのをみる。加藤はこうした空の風景を好んだ（例：幼少期に過ごした「美竹町の家」から見える空）。

②「そのとき私は恍惚として万事を忘れていた。ただひとつの考え、それが決して……」

・ひとつを除いてすべてを忘れていた、と書くことで、「ただひとつの考え」を強調。

・加藤は、婦人が加藤個人ではなく、日本人への興味から加藤と会っているにすぎないのではないかと疑っており（「私の疑いは決してはれなかった」）、日本人への興味が満たされれば別れることになるかと予感している。

③「パッシーの彼女の部屋で過ごした夜とその晩のカルヴァドスの味は」

・「パリの女たち」（1964年）には「ある婦人」とカルヴァドスをくみかわしながら「クレオパトラの目を地中海にみたてる趣向」の詩を読んで、婦人の目をのぞき込む場面がある。

④「彼女はシャンティーイの後で、こういつていた……」

・加藤は「万事を好都合に解釈」することで、その後も婦人との交流を続けた。

・婦人が医者の仕事（目的のある仕事）を羨ましいというのは、婦人が過去に囚われ、生きる目的を見失っているということか。医者としての加藤に触れる点では、「診察」を求めたスターリン主義者の女と同じ。

【第 13 段落】次章への接続

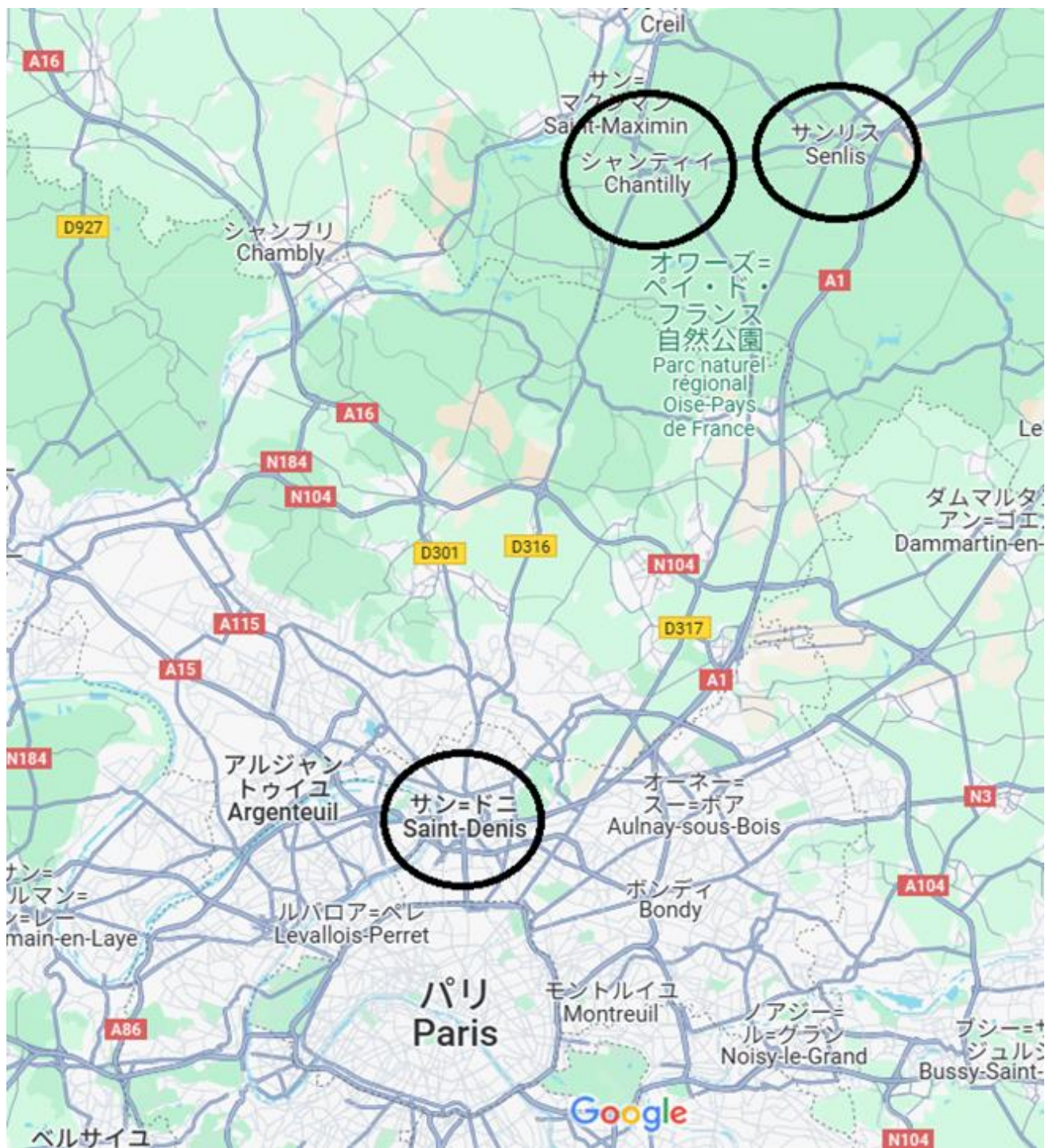
私たちはよい友だちであった。どうしてそうでないはずがあったろうか、①パウル・クレーの機智と諧謔、微妙な線の動きと甘美な色調の変化、またその画面の触感を、二人の人間があれほど好んでいたかぎり。②しかしほんとうの恋人であるためには、私たちのどちらも、十分に盲目的でもなく、十分に未来を夢みてもいなかったのであろう。

①「パウル・クレーの機智と諧謔、微妙な線の動きと甘美な色調の変化、またその……」

・婦人との会話、婦人や婦人と過ごした場所、婦人とのふれあいを、クレーの作品から受ける印象に重ねているとみるべきか。「二人の人間があれほど好んでいた」というのも、加藤の婦人に対する好感を示している。

②「しかしほんとうの恋人であるためには、私たちのどちらも、十分に盲目的でもなく……」

・恋人になるためには、恍惚して過去や未来を忘れるか（恋は盲目）、恋人との未来を夢みなくてはならない。加藤と婦人の関係は、恍惚は長続きせず、未来を夢見することもなかった。
・これに対して、次章（冬の旅）で出会う女性とは、最初は「未来を考えていなかった」が、やがて彼女と過ごした時間が「想像することのできるあらゆる未来につながって」ゆくことになる。さらにその次の章（音楽）では、ある種の音楽がよびおこす恍惚陶醉の経験と、女性との関係が重ね合わされる。





パウル・クレー「Senecio (セネシオ)」(1922年) バーゼル美術館蔵